

をなし遂げられて、既に十四巻が発刊されたことであります。そして今春、甲府市制施行百周年記念事業としての甲府市史が完成を見る事が出来ます事は、この上ない甲府市民の喜びと感激ひとしおで御座います。

又石造物調査に致しましても私などは特に関心もありませんでしたが、津金の海岸寺や国立公文書館などの見学等々により石造物に対する興味を起こさせる様仕向けて下さり、又小沢委員、金丸先生や山田先生並びに事務局の皆様の並々なぬ御指導により何とかその責任の一端を果せる事が出来ました事を心から感謝申し上げますと共に私の生涯の喜びと思う次第で御座います。

（市史編さんを終えて）

調査協力員 埴原 福 貴

武田一丁目法華寺の山門をくぐるとすぐ右側に百体近い無縁仏の石塔が並んでいる。

その中に随信院殿妙解日純大師、萬延元年五月十六日没という墓石と、その後方に、妙法淨円院玄覚日悟居士、甲府勤番、小林喜八郎平晨政という墓がある。

戒名からして、かなり名だたる家門の墓であろう。甲府勤番小林喜八郎平晨政之墓というのは、家系が絶えたのか、あるいは江戸へ転勤となって此処へ残されたのか、何れにしても現在を訪れる人もいない。翻って、この石造物調査は、このまま放置すれば前記無縁仏も同様、社会から忘れ去られ、散逸し、何処へともなく消滅してしまうおそれのあるものを、何年かかけて市内総ての石造物を調査

し、石造物の謄本とも言うべき「甲府の石造物」を刊行された意義は大きい。

祖先の信仰や、種々の伝承の象徴としての石造物が甲府市民の心から風化するのを防ぎ長く生き続けることを強く願うものである。

（市史編さんを終えて）

調査協力員 樋口 光 治

甲府市が誕生して百年の歳月を経ました。古い城下町から近代都市甲府市の発展の歩みは波瀾（ハルナ）もあり災害も幾度か経験した。

つねにたくましい市民性が根源となり市民の愛市の努力が市勢進展の礎となって現在の繁栄を創りあげたといっても過言ではあるまい。

産業都市への進展、誇り高い文化の創造、殊に地場産業の研磨工業は国際的に声価をあげている。不幸にも昭和二十年七月の空襲により、市民生活も産業基盤も灰燼（カイジン）に帰した。

併し甲州魂にきたえられた市民は苦しさや貧しさに耐え復興をなし遂げ、更に新しい時代の経済、産業、文化を創造し、現在では全国地方都市でも屈指の位置にまで上ったという。

これを克明に詳述して後世に伝えることが今、世人の大切な役割だと信じる。それは甲府市史編さんの事業であり近く完成されると聞く。この重要な事業（行政）を担当された高木伸也室長（主幹）の完成への貢献に賛詞とスタッフの各位にご苦勞様でしたと申し上げます。